

第 291 回研究報告会 (4 月 19 日)

母国語で発表できる国際学会

—東アジア宗教研究フォーラム創立記念大会報告—

金子 昭

東アジア宗教研究フォーラムは、従来あった東アジア宗教文化学会が発展的に解消されて成立した、東アジアにおける宗教研究の国際学会である。この創立記念研究大会が 2 月 20 日に韓国の国立済州大学 (済州島) で開催された。本報告の前半部分では、このフォーラムの特徴について述べ、後半部分では創立記念大会での私自身の発表内容について紹介した。

東アジア宗教研究フォーラムには、(1) 持ち寄りで作りの国際学会、(2) 母国語で発表できる国際学会、(3) 若手を育てるための国際学会という 3 つの特徴がある。

まず 1 点目であるが、これは頓挫した東アジア宗教文化学会の後を受けて、研究者・教団関係者が個人の資格で自主的に参加できるネットワークの軽い学会にしようという思いが背景にあった。そのためには、予算確保にも工夫をこらさなければならないし、その場合、とくに研究費や外部資金を得やすい専任研究者の奉仕精神も欠かせない。

2 点目については、人文系の国際学会は学問的自我介绍と国際交流の場という性格が強い一方、研究発表は母国語で行ってこそ、自己の最高の学問的水準が発揮できる側面がある。そのためには、優れた翻訳者・通訳者を確保する必要があり、また参加者には多少言葉が通じなくても、積極的に交流する意志と努力が求められよう。ただし、この仕方では、3 カ国語に限界ではないか。その意味で、日中韓の 3 カ国語で行われる東アジア宗教研究フォーラムは適正規模の国際学会であるとも考えられる。

3 点目は、ただ単に次世代の研究者のためだけでなく、非常勤研究者にも国際的発表や国際交流の場を提供する学会にしたいという狙いも込められている。国際学会としての権威も必要かもしれないが、これとは逆に「草の根的交流」を主眼としたあり方にしてよいのではないか。東アジア宗教研究フォーラムは、東アジアの研究者の交流という側面を強調する傾向を持っている。

2 月 20 日の創立研究大会では、日韓分科会と日中韓分科会に分けて、19 本の個人研究発表が行われた。日韓・日台など研究対象としての宗教が 2 カ国以上にわたる内容の研究、また日本人による韓国宗教研究・韓国人による日本宗教研究といった研究者による越境的な研究など、多彩な研究発表が行われた。これらの研究に携わっている場合、少なくとも母国語以外に 1 つ以上は東アジアの言語にも通じてくることになり、意志疎通の問題は多少とも軽減されてくる。

私は、日中韓分科会で、「台湾・仏教慈濟基金会による東日本

大震災支援活動—2011～2015 年の 5 年間の歩みとその評価—」という発表を行った。日本語を使用しての発表だったが、発表の工夫として、予稿集に日中韓の 3 カ国語による完全原稿を掲載し、またパワーポイントのスライドの文字を主に中国語及び韓国語にして行った。実際の発表時間は 20 分だったが、本報告では、解説コメントを交えながら 40 分かけて再現・実演した。

発表内容は、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災における台湾の仏教慈濟基金会 (世界最大の仏教 NGO) の 50 億円にも上る被災者への義援金直接配布の状況、及びこの支援活動の背景にある「善の循環」の思想、また現在までの 5 年間にわたる被災地での長期の支援活動の歩みをたどり、その活動の評価について論じるものであった。

The ANU Religion Conference で発表

堀内みどり

標記コンファレンスが「Religious Transformation in Asian History」(アジア史における宗教の変容)をテーマとして、オーストラリアの首都キャンベラで、オーストラリア国立大学が主催して、4 月 7 日から 9 日にかけて開催され、堀内が出席・発表した。

コンファレンスの趣旨文では、アジアの歴史や文化がヒンドゥー教、仏教、儒教、道教、イスラーム、シーク、神道という諸宗教に深く影響を受け、また、その伝統は、人々に精神的なガイダンスを与えただけではなく、アジアの人々の日常生活における倫理や道徳にも影響を及ぼしている一方、地域をこえた文化やコミュニティの形成は地域的な宗教伝統によって形作られてきたと、まず述べている。その上で、現代は、その社会的構造は植民地主義や帝国主義によるチャレンジの波をかぶった状況だとする。そして、西洋的現代化が社会や政治、法律、文化、慣習や思考様式に変化をもたらしたと同様に、各地の伝統的な宗教にも影響を及ぼしている。したがって諸宗教はその影響力を弱めたり、また生き残るために変容したりしてきた。そこで、コンファレンスでは、「植民地という状況の中での主たる問題とは何であったのか」「現代化にそれぞれの宗教集団 (教団など) はどのように反応したのか」などの観点から、変化した時代における宗教の変容をテーマとした研究発表が行われた。12 カ国から 67 名が参加し、3 つの教室を会場として行われた。

堀内は「The Meaning of “New Religion” in Japan: Tenrikyo and the Meiji Era」と題し、幕末から明治期における日本の宗教環境を概説した上で、家の宗教から「私の信仰」へと“信じるということ”の変容における天理教の意義について述べた。

グローバル天理

第 17 巻 第 6 号 (通巻 198 号)

2016 (平成 28) 年 6 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 高見宇造

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒 632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

印刷 天理時報社

Printed in Japan